乙貞

第14号（通巻第3巻第4号）

1984年 2月29日 発行

守山市立埋蔵文化財センター発行

☎ 0775-85-4397

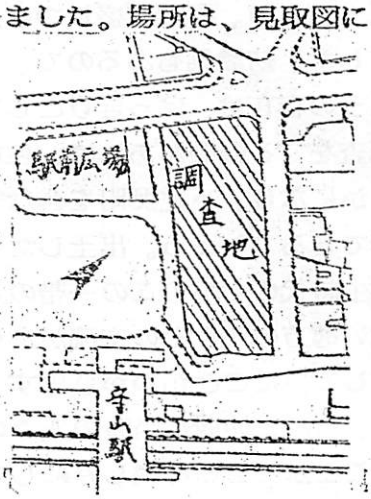
〒 524-02

守山市服部町1318

各地に、梅のつぼみがそろそろふくらみかけました……の声を聞きつつ、あいかわらず寒さのきびしい毎日が続いています。とは言え埋文センターも四年目を向かえ、きびしい寒さの中、ますますいそがしく動いています。今回の「乙貞」では、この埋文センターの様子を現場からの近況報告もまじえてお知らせしたいと思います。

…… 吉身北遺跡　発掘調査開始……

吉身北遺跡の発掘調査を1月28日より開始しました。場所は、見取図に示しています通り、守山駅西口の駅前本通りと駅前広場に挟まれた所で、約2,800㎡の広さがあります。



この吉身北遺跡は、古墳時代後期の集落跡として周知されており、過去の調査でも、竪穴式住居をはじめとする古代の集落を検出しています。

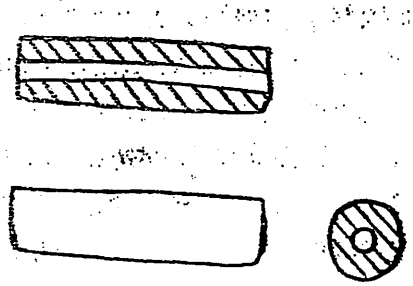
今年は、56年の豪雪が引合いに出される程の寒波に見舞われており、発掘作業の方も停滞しています。調査地の詳細を伝えるには、今少し（？）し時間が必要なのですが、現状では竪穴式住居2棟（円形のものと方形のもの）と溝1条を検出しています。この住居と溝は、弥生時代中定後期の時期のものと考えられ、過去の調査では弥生時代の遺構は見つかっておらず、吉身北遺跡の新たな側面を見出したとも言えます。調査地は四方が塀に囲まれており、見学していただくわけにはいきませんが、「乙貞」紙面他により、調査状況をお伝えしたいと思います。御期待下さい。（岩崎）

…… 吉身西遺跡　発掘調査抄報……（下え納3次）

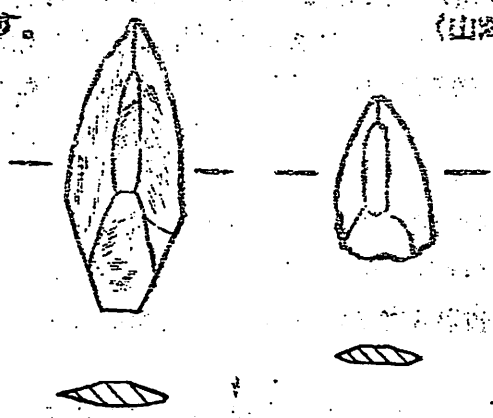
昨年10月から継続中の吉身西遺跡発掘調査は大詰となってきており、2月末を目度に鋭意進行中です。

現在最も興味深いのは、下之郷町地先のKマート近くで、本年に入ってから調査を開始した部分で、前号で紹介した「ムラを囲む環濠」の内側で、無数の小穴と、約60ケ所の土坑と呼ぶ径50㎝～2mの穴がみつかったことです。この地点からは、碧玉と呼ぶ「宝石」の一種で首飾り（管玉　図－1）と、それをつくる途中の未製品や石鏃・石剣（図－2）・石斧（図－3）・磨製石鏃（図－4・5）・有柄式石剣（図－6）・石錘（図－7）など多量の石器類が出土し、径約1m程の大きく、深い（2m）の土坑からは、完全な型で3個の壺や甕が埋納された状態で出土しました。これらの検出状態は、月のクレーターよりも激しい「あばた」状の跡と言った方がよい程の穴だらけの状態です。これは、この場所でムラの人たちが集ってきて、農業に関係する「まつりごと」を行なった場所と考えられます。穴の状態をよく見ると、人を埋めた様子はなく、炭や灰、焼土の入ったものがあるところから、穴で火をもやしたのではないが、近くで火を使った儀式をおこなったのちに、土器を故意に穴の中に埋めたものと思われます。なお、これは、ムラの一番外側（外周の中でも南端）にあり、ムラを囲む溝の中にも、儀式に使った製品が幾つか出土しています。木で作った杓子、小さな箱、板に無数の穴をあけたもの、容器（盛りつけ用）があるほか、農具ではない鋤、鍬も混入していました。紡織具もあるので、ムラの中で機織りがあったこともわかります。ムラの存在は、はっきりとしているのですが、今後、赤野井道よりも北側で調査をする機会があれば、住居跡など当時のムラの規模や生活の様子が明らかになり、下之郷町を含む守山の前身（先祖）の社会を明らかにすることができるでしょう。出土したものを市内や県内の他の遺跡と比較するとき、弥生時代の中頃のこの一帯の人々は伊勢湾地方、近畿地方、山陰地方などの遠い地方の人々との交流があり、服部遺跡とほぼ同様の大規模な集落跡が存在していたことがわかります。調査の途中ですが、整理作業を細かく行なえば、もっと明確な当時の人々の、「金にかえられない」貴重な足跡を世に示すことができると楽しみにしています。

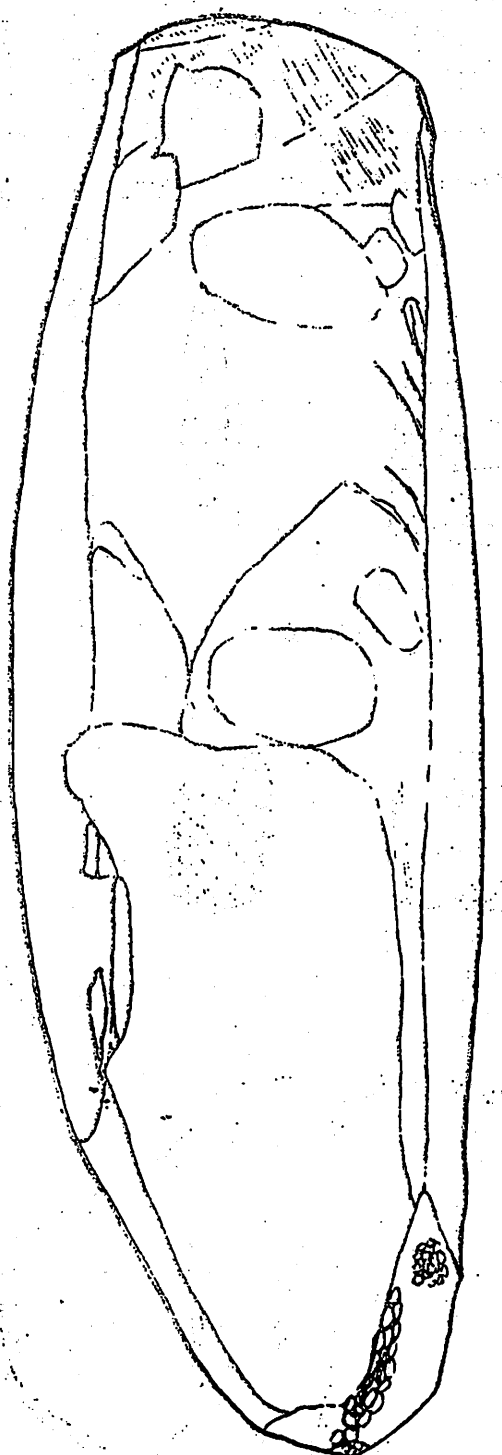
（山澄）



図－1

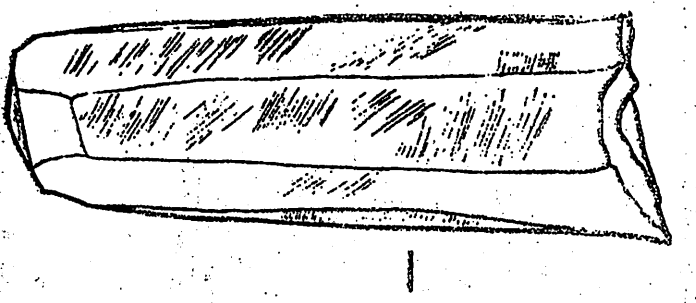


図－4・5

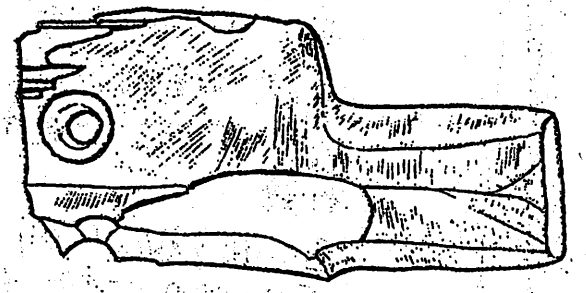


- 管玉（くだたま）
  首かざりの一種
- 石斧（せきふ）
  石で作られたおの
  おもに木を切ったりする
  時に使ったものと思われる。
- 石錘（せきすい）
  石で作られたおもり
  真中の凹のところにひもを
  かけて使ったものであろう。

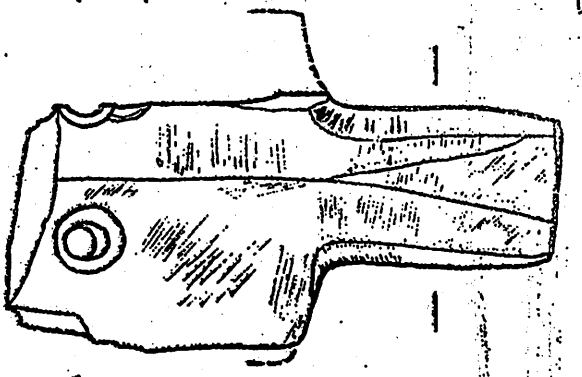
図－3

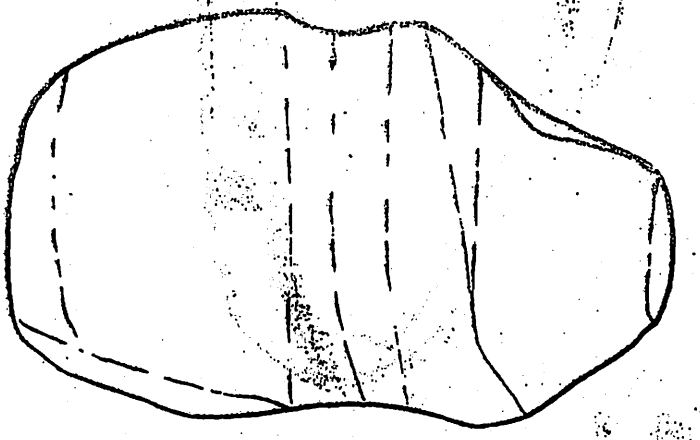


図－2



図－6





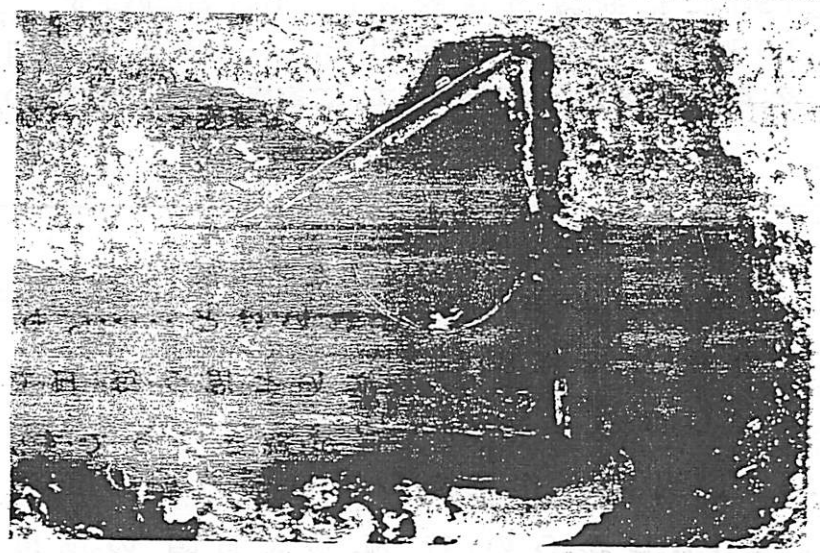
図－7

横江遺跡　発掘調査抄報

昨年7月より調査を開始した横江遺跡では、現在までに、古墳時代前期・後期・平安時代末期・鎌倉時代・室町時代の遺構、遺物を確認しています。今回は、その中でも特に、古墳時代前期の土壙（SK－37）と鎌倉時代の井戸（SK－1）について簡単に報告したいと思います。

この古墳時代前期の土壙（SK－37）は、大きさが約4m×3．5m、深さ約1mもある大きなもので、ほぼ楕円形をしています。遺物は、竹グシ3点、石製円盤1点、有孔円盤1点、ミニチュア土器1点、用途不明の木製品が数点、さらに高杯や小型丸底壺などの供献土器を中心とした多量の土器が出土しています。この土壙とよく似たものは、前に2点を　号で報告したSK－16があります。これらの性格については、遺物から考えると、「まつり」（儀式）に関係が深いものであると思われますが現在のところ断定はできません。今後、「まつり」（儀式）を行なった場所が見つかればはっきりすることでしょう。

次に、鎌倉時代の井戸（SK－1）についてです。この井戸は、調査中なので、現時点でわかっていることを報告します。井戸の掘方は直径約1mで、ほぼ円形をしています。井戸枠（一辺約1m）は、検出面より、約1m下で検出されました。遺物は、ハシ状木製品1点、鉄製刀子1点、牛の角（あるいは鹿のそれか）1点、それに黒色土器の椀、土師器の小皿を中心とした土器が出土しています。



井戸

この井戸は、2時期にわたって構築された可能性の強いものです。おそらく最初に構築した井戸が埋った（あるいは埋められた）のちに、もう一度構築されたものでしょう。

さて、この井戸からは、「埋井の竹」と考えられるものが出土しました。埋井の竹とは、井戸を廃絶するにあたって竹を井戸内にさしたもので、埋井の儀式の中で行なわれたものです。つい近年まで、地元でも井戸を埋めるさいに、竹筒やビニールのパイプをさしこんだといいます。これは、単に井戸内のガスを抜くためのものであったといいますが、おそらくこれは、「埋井」という意識的なものが薄れてしまい、実用的なことだけが残ったのでしょう。中世においては、ケガレなどをいみきらう風習が非常に強かったといいます。今回の井戸の例もそのあらわれであるとすれば、非常に興味深いものであるといえるでしょう。（宮下）

以上、3遺跡を紹介してきましたが、市内ではこの他に守山高校横の「金森東遺跡」でも昨年6月以来調査を行なっています。また、南中学予定地でも近く調査を開始する予定でいます。各遺跡の調査の様子はまた「乙貞」の紙面でお知らせできると思いますので、成果に御期待下さい。

お知らせ

埋文センターでは、3月18日より25日まで、今年度4回目の特別展を、「58年度発掘調査速報展」と題して行ないます。

また、20日には県の兼康保明氏による講演会「戦国時代の近江を掘る」を2時より開きます。ご家族そろってぜひおいで下さい。

編集後記

比良山の雪げしきはきれいけど……、もうそろそろ春の香りを満喫したいと思う毎日です。でもまだしばらく寒い日が続きそうです。この寒さの中、現場で作業をしている方々御苦労様です。18日からの特別展に日頃の成果を十分見ていただける様に頑張りたいと思います。

K記